

理論と実践を往還して、真の実践力を育むために！

教職大学院とは、専門職大学院の一つで、高度で専門的な知識・能力を備えた高度専門職業人としての教員養成を目指した大学院です。ですから、教職大学院では、講義中心ではなく、実習、事例研究、ワークショップやロールプレイング、そして模擬授業といった実践的で多彩な学びが核となっています。

「理論も学び、実践も学ぶ。そして両者を丁寧に橋渡しして、真の教育実践力を育てる。」——これこそが、教職大学院の特徴です。重厚な理論に裏付けられた豊かな実践が展開でき、しかも内省的な姿勢をもつ教員を一人でも多く育てたい、それが宇都宮大学教職大学院の願いなのです。

◆体験型を基本にした多彩な学び

教職大学院の授業の特徴は、院生の能動的で協働的な学びを根幹にしていますから、教員から一方的に「注入され、承る」だけの場面が連続することはほとんどありません。事例研究や授業研究では、それを分析・解釈できるだけの理論も学びます。理論を学ぶと、それを学校現場にどう活かせるかということも必ず検証します。ワークショップ的手法で、議論や討論をすることもあります。合意形成を図ることもあります。また、一人ひとりの気づきや発見をもとに具体的な教育実践を構想することもあります。

全ての基本は、院生一人ひとりの真の実践力を鍛えることにあります。学校改革力・授業力・そして個への対応力等を育むために、多彩な授業内容が準備されているのが、宇都宮大学教職大学院です。



◆教職大学院のこれから

教職大学院は、平成27年4月現在、全国に27校あります。今後は、数年の間に50校を越える勢いで設立される予定になっています。

また、中央教育審議会教員養成部会では、教職大学院を、原則として、「地元教育委員会等と連携して全県に設置促進」することを、答申素案(H27.10)に盛り込んでいます。同じく、同答申素案には、教育委員会が行う教育研修の中核的パートナーとしての役割を教職大学院が担うことや、教職大学院が大学と教育委員会・学校との連携・協働のハブになること等が盛り込まれています。

いずれにしても、今後、教職大学院が教員養成及び教員研修等において、極めて重要な位置を占めるようになるのは、間違いのないことのように思われます。

《大学院生が語る教職大学院の魅力》

(50音順)

◇伊藤 昌夫(現職派遣院生)

＊日々の実践の省察と理論を学ぶことで、多面的な見方が広がります。心強い先生方や仲間と充実した日々です。

◇大登 英樹(現職派遣院生)

＊これまでの実践を省察し、教授と院生とともに語り合い、新たな学びを重ねる充実した日々を送っています。

◇大類 仁(現職派遣院生)

＊多分野の教授から学ぶ最新理論と学校訪問・実践研究から見識をひろげ、自己の経験と常識を省察できます。

◇鎌田 大河(学卒院生)

＊人が人を教えるという責任の重大さを忘れずに、この教職大学院を通して今後も学んでいきたいと思っています。

◇紀 令子(現職派遣院生)

＊学びに向かう子どもたちの姿から多様な学び方の可能性を追究しています。真剣な眼差しや笑顔が原動力です。

◇國井 朱美(現職派遣院生)

＊教育現場の課題がバランスよく学べ、実践を省察する中で花開いた知は、教師の専門性を高めています。

◇小林 真也(現職派遣院生)

＊「よい仲間は人生を豊かにする」素晴らしい仲間と共に学べる環境が用意されていることが大きな魅力です。

◇澤田 慎一(現職派遣院生)

＊教育について真剣に議論できる幸せな時間と空間。仲間とともに、協働的な学びの中で、自分自身を高めます。

◇鋪屋 佳子(現職派遣院生)

＊素晴らしい教授陣に支えられ良き仲間と学び合う。決して一人では導き出せない「英知」に至る崇高な毎日です。

◇鈴木 隆夫(現職派遣院生)

＊日々の実践を省察的に振り返り新たな「知」を生成する営みは、子どもの姿から学ぶ喜びや驚きで一杯です。

◇田島 文博(現職派遣院生)

＊学び続ける教師が集い、「研究のための研究」ではなく、「子どもたちの姿を意識した研究」に挑戦しています。

◇藤浪 友美(学卒院生)

＊学卒院生にとって、学部時代よりも深く学校現場や自分が教師になった時を意識できる、学びと成長の場です。

◇星 義夫(現職院生・附属)

＊「自分の教育実践の省察」「今後の教育実践の創造」「それらを可能にする教員と仲間の存在」が魅力です。

◇吉原 俊(学卒院生)

＊学卒院生も教員としての意識を持つことができます。教員になる前に実りある学びができることを幸せに思います。

「協同」と「協働」

教育実践高度化専攻特任准教授 石嶋 和夫

平成27年現在、全国には国立21校、私立6校、計27校の教職大学院があります。各教職大学院の学校紹介や概要説明に目を通すと、「協同的な実践研究」「他者との協同」「地域協同」「職員間の協同」「協働的学習」「協働遂行力」「協働する力」「協働力」「教職協働力」など「協同」あるいは「協働」という言葉が、至る所で用いられています。その分だけ、現代の教員にとって必要かつ重要なキーワードと言えるでしょう。

国語辞典によれば、「協同」は「二人以上の人や二つ以上の団体が、役割を分担しながら仕事をする事」であり、「協働」は「一つの目的を達成するために、各部分やメンバーが補完・協力し合うこと」です。ちなみに「共同」は、「二人以上の人や二つ以上の団体が、一緒に仕事をする事」です。

特に「協働」については、以下のように定義付けをしている所もあります。

上越教育大学教職大学院では、「協働力」として「教員同士はもちろん、保護者や地域の人々など、様々な人々とのつながりを持ちつつ課題を解決していく力や、人々の中に協働性を構築する力のこと。」と定義付け、鳴門教育大学教職大学院では、「教職協働力」を培うために「コミュニケーション力」「コーディネート力」「リーダーシップ/フォロワーシップ」「マネジメント力」の育成に努めています。

私は、「お世話になります。」「ありがとうございます。」「よろしくお願いします。」という言葉掛けと、謙虚な態度で相手に接し、上から目線にならないように注意することが、「協同」と「協働」の基本だと思っています。

《シリーズ:教職大学院授業紹介②「授業における個のとらえ方と対応」(選択科目[前期])》

この授業は、集団で行う授業の中で、一人ひとりの子どもの思考や特性をどのようにとらえ授業に生かすことができるのかを考えていくものです。研究者教員、実務家教員がチームとなってさまざまな視点から授業の中の「個」について検討します。

ここでは、談話記録をもとにしながら授業の中の子どもたちの思考について考えた授業について紹介します。

談話記録とは、授業中に子どもたちや教師が発言したことをそのときの様子も含めて書き起こしたものです。教師は普段の授業の中では、即興的に子どもたちの発言を受け止めそれに対して返していると考えられます。しかし、書き起こしたものを後から見てみると、「〇〇さんの発言、自分はこう思っていたけれど違う意味だったのかも。」とか「この子の発言とこの子の発言をよく見るとつながっている。何か影響を受けているのかもしれない。」とさまざまな気づきが湧き上がってきます。

例えば、ある子どもの発言を追ってみると、その子の思考の流れが見えてくることもあります。また、まだうまく言葉にならない子どもの思考を教師が周りの子どもたちとつなげる働きかけをしている場面が、授業の随所に見られたりもします。一見授業から外れているような発言もその子どもなりの思考の表現であり、それを生かしていく



ことで子ども同士のつながりもできるということも確認でき、集団だけでなく「個」を視点に授業をとらえることの大切さ、面白さを共有できた授業となりました。

発達障害の子どもたちの特性、教科の内容と関連させた個の理解、ペアやグループなど複数の形態を取り入れた場合の個人の学びの様子など、さまざまな視点から授業の中の「個」に迫ることができるのがこの授業の醍醐味です。最後に受講者の声の中からいくつか紹介しましょう。

○授業の中で子どもたちは教師が気づく学びよりも何十倍も何百倍も多くのことを考え、思考をめぐらしていたことがわかった。

○「この人は自分のことを真剣に考えてくれている」と子どもが感じてこそ個への支援が成り立っていくものであると思った。

○私たち教師は常にすべての子どもたちとつながっており、学びの連続性の中でそれぞれを伸ばす方法を考えなければならない。

○個を完全に理解することは不可能だけれども、多面的に見ることで理解を深めることができる。そのためには教師の関係づくりが大切。

(司城 紀代美)



《編集・発行》宇都宮大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻 (教職大学院)

〒321-8505 栃木県宇都宮市350番地 Tel: 028-649-5242 <http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/koudoka/index.html>

◇教職大学院Facebook: <https://www.facebook.com/uuptnet> ※院生が編集し、教員が管理しているFacebookです。